

まんだら通信

第196号(通巻232号)

平成24年10月 西暦2012年 佛暦2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

石戸寺のお彼岸回向

春と秋のお彼岸の中、兼務寺の西横渚の石戸寺では、ご本尊のお不動様と、お祀りしているお檀家のご先祖代々に、平穩無事に暮らすことが出来て有難うございませ、という感謝の気持ちをこめて、世話人の皆さんと一緒に回向を続けています。先月二十二日十時から、例年通りにお勤めをしましたが、終わってからの四方山話が、世間に疎くなりがちには貴重な時間になります。

用意されたお昼をご一緒しながら、ゆつくりとひと時を過ごせればいいのですが、万事せわしい私の今の身の上ではそれも出来ず、申し訳ないと思っております。昔は、この石戸寺に限らず、どこのお寺にもお坊さんがいて、お檀家の子供の名



付け親になったり、心配ごとや嫁婿取りの相談に乗ったり、夫婦げんかの仲裁をしたり、寺子屋というほどではなくても読み書きを教えたりしていました。そして何よりも、日々聞こえてくるお勤めの声や鐘の音に、言い知れぬ安心を感じていました。たとえ住んでいなくても、毎日開けてが出来れば、建物のためにも、近くを通った時の気持ちも、晴れやかに思うのですが。ところでこのお寺は昔、紫雲寺の門前、今の駐車場にあつたことをご存知でしょうか。門前の、石戸寺のお檀家、鈴木茂左衛門さんの、亡くなった清蔵おじいさんが「石戸寺はナ、紫雲寺の住職の隠居所だつたから、檀家のつづが良かったんだよ。」と自慢していたことを思い出します。

明治の始め、秋の終わりの、とても強い西風の夜、川下集落の西の外れから出火して、川下はもとより西横渚、東横渚から今の白浜小学校の裏の青木集落の半ばまで、ひと舐めにするという大火事があつたそうです。取り入れが済んだ田んぼに積んであつた稲ワラ(いなぶら)の束についた火が、強い風に乗って次々に燃え広がつたということです。

この時、今の石戸寺の場所にあつた大日堂も焼けてしまつたので、紫雲寺の門前から移築したのが、現在私たちが見ている本堂です。

六年ごとの『たのくろ巡礼』で、西国三十一番、坂東三十一番と、同じお寺なのに札所が二つあるのはそういう理由からです。

お大師さまのご遠忌を記念して大改修をしましたが、柱にあいた使っていない『ほぞ穴』などにその名残を見ることが出来ます。

おだやかな旅立ち

生まれたからには必ず死ぬと誰でも知っていますが、いざ自分のことになると一日でも長く、と思ふのは人の常。

明治の初め偶々辿り着いて、日本が殊のほか気に入つたラフカディオ・ハーンは、日本女性と結婚し、名前も小泉八雲になりましたが「日本人は、ふすまを開けて、隣の部屋に行くような気持ちで旅立つ」といつたそうです。その頃の人は、朝になれば日が昇ると同じように、仏様の世界があるのは当たり前でしたから、死ぬことをうろたえなかつたのです。明治以来の教育で、目に見えないものは疑つてかかる、「合理主義」という名の宗教に代わつてしまいましたから、仏様と縁が遠くなりました。

先日のNHK『クローズアップ現代』で、在宅のガン患者さんのお世話をしていられるお医者さん達がまとめた大がかりな調査によると、亡くなつたご両親、死んだペット、友だちなどの『お迎え』があつたよ、と家族に伝えられた人が、なんと四割もいたそうです。遺されたご家族が証言する通り、そのような人たちは例外なく、安心して旅立ちます。ただ、そうなるためには、孫たちも含めた家族の、日ごろの暖かい看病が何より大切だそうです。

色々の事情で、病院や施設で亡くなる人も中にはあるでしょう。けれども出来る限りご本人の希望をかなえることが出来るような努力は必要だと、私は思うのです。あなたのことを一生懸命考えた末だよということがご本人に分かれれば、自宅以外で旅立つにしても納得してもらえらるでしょう。

他人事ではなく、私自身もいつお呼びがかかるか分かりません。家族には前もって言うてありますが、ピニールの管につながられて生きながらえるのは御免蒙りたいし、住み慣れた我が家で、家族やネコ達に見守られながら、仏様の世界に旅立ちたいと願っています。

余滴

▼ほんとうに秋が来るのかと心配になった今年の残暑。この頃になって漸く涼しくなりホッとしています。
▼今月9~10日、恒例になった人間ドックの予約日。10日発行の『まんだら通信』を急いで作っています。
▼農家が待ちわびた雨が漸く降って、先週あたり食用菜花の蒔き付けがほぼ終わりました。早ければ11月初旬には初出荷ですね。この食用の菜花、今では千葉県他高知県・三重県・香川県などに栽培が広がりましたが、川下集落の弥市のおじいさんが、土手に咲いている菜の花を刺し身のツマとして、東京に出荷したのが初めというお話、ご存知でしたか。

今でも菜花といわず「つまな」と呼ぶ人が多いですね。みんなが見過ぎていたことを、違う角度から見ると、お金につないだ思い付きが素晴らしいと思います。▼『まんだら通信』の発行部数は、現在1,100部。そのうち郵送分が550部です。紫雲寺のホームページにも、同じものを欠かさず掲載しています。海外でも読むことが出来ますので、お知り合いにも教えて下さると有り難いです。序でに、1ヶ月当りの発行の費用ですが、大雑把に一部当り印刷と紙代で50円。郵送代合計4万円で、都合1ヶ月8~10万円です。今年お寄せ戴いたご寄付が9月までで39万5000円でしたので

どれ程力づけられるかお分かり戴けるとおもいます。▼今月の野草はツルボ(スルボ、サンダイガサ)【ユリ科ツルボ属】です。ツルボは蔓穂、サンダイガサは参内傘で、お公卿さんが宮中に参内する時、お供が後ろから差しかけた大きな傘を畳んだ形と花穂が似ているからだそうです。お盆過ぎ、乾いた土地に芽が出たと思うと、彼岸頃にご覧のような可愛い花が一面に咲きます。草丈は20センチほど。スイセンなどと一緒に中国大陸から持ち込まれ、飢饉の時には良く晒して食料にするとか。戦後、食べた人が多かつたインターネットに書いてありました。 2012/10/04 龍渉



にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊 第八十一話 靴屋さん

今回は、港町・横浜の小さな靴屋さんで実際にあったお話です。

横浜を代表するおしゃれな町に、元町という商店街がございますが、どうして元町と名づけられたかご存知でしょうか。

実は、約五十年ほど前、黒船、そうでございます、あのペリーが来航いたしました、わが国は大騒ぎになったんでございますが、その際に、幕府は条約を結びましたから、やってくる外国の人たちが住む町、いわゆる居留地をどこかに建設しなければならなくなつたんですね。

江戸に近くて、外国船が着岸できる港がどこかにないか、白羽の矢が立ったのは、半農半漁だった横浜村。遠浅の海、人々が行き来する東海道から適当に離れている。よし、ここにしようと、横浜村に、居留地と港の建設がはじまりました。

まず、考えたのは港の近くに居留地を作り、そこに領事館やら商館を建て、外国人たちは山手に住居を建てて住んでもらう。いま、山手に女学校や教会、外国人墓地などがあるのは、そのせいなんです。

そして、その居留地は、尊王攘夷の浪士たちに襲われないう、まわりに堀を造り、数か所の入口に関所をもうけることにしたんですね。ここでも、当時のその名残がありますね、JRの関内という駅。あれは、「ここは関所の内側ですよ」という意味ですね。

さて、元町の話。では、もともと横浜村に住んでいた人はどうしたらいいか。そこで、関所の外と外国人住宅のある山手の間。つまり、山と掘割の間のわずかな細長い地帯に住ませました。もちろん、彼らはそんな崖下では、畑仕事も漁業もできない。そこで、外国人相手の

仕事を始めたんですね。クリーニング、西洋家具の製作、洋服の縫製、外国食器の輸入販売、レストラン、花屋さん、靴屋さん……これまで日本になかった国際的な商売をはじめたので、町が大変ににぎわった。

この町を元横浜村といったことから、元村と呼び、やがて、村ではおかしいだろうということで、元町になつたんだそうですね。これがおしゃれな町、元町の歴史。

おや、前口上が長くなりました。その元町に、通称「ドイツの靴屋さん」があります。

正式には、「ドイツの足の健康館 赤い靴」横浜元町本店。まあ、わかりやすくいえば、ドイツ製の靴を売っているお店です。

ある日のこと、ひとりのおしゃれな七十年代後半の女性が元町を散歩中、店の看板を見つけ、店内に入っていました。

すると、中年の男性の店員さんが女性の足型をとり、採寸も縦横高さそれぞれはていねいに測ってくれ、「お客様の右足が五ミリ短いので、靴底で調整しましょう」と言つて、靴底を叩いたりしながら、彼女の足にぴったりの白い靴を出してくれました。

履いてみて驚きました。実に軽いし、疲れにくい。いつもなら、一日に一回は脱いで、指先を解放させるのが習慣になつていましたが、そんなことをしなくてもよくなつたので、彼女は、とてもうれしかったそうです。

それから、半年過ぎのこと。その白い靴を履いて元町にショッピングに来た彼女は、ついでに、今度は黒い靴を買おうと店に入りました。すると、店員が彼女が履いていた靴を見て、「だいたい、傷んでいるようですね。修理しましょうか」といったので、思わず「修理していただけますか。じゃあ、ぜひ、お願いします」と言うのと同時に「この靴、私の足にとってもフィットしているんで、じゃあ

もう一足、これと同じ白い靴を……」と言いました。

すると、店員さんは奥に入り、しばらくして、首を振りながら「申し訳ありません。似たのはあるんですが……そんなことより、この靴、いつでも修理しますから、心配しないで、今度、お暇な時に店に待って来てください」と言つたそうです。

もともと、新たに黒い靴を買うつもりで来た彼女は、その白い靴を修理に出し、また、新しく黒い靴を買って帰つたそうです。

一週間後に「修理ができました」と電話があつたのですが、彼女は忙しいので行けず、取りに行つたのはそれからさらに、半年後のことでした。

「いらつしゃいませ。お待ちしておりますました」

修理を頼んでいて、お金も払わず、半年後に取りに来た客にも笑顔の店員さん。それだけで彼女は胸がいつぱいになりました。

そして、今度は黒い靴を修理に出し、修理代だけでは悪いので、また、新しい靴を買おうとしたら、店員は、またサイズを測り直し、彼女の目を見て、こう言つたそうです。

「お客様、膝がお悪いのではありませんか。だったら、いまお買いになると、膝が治つた時に合わなくなりますから、膝が治つてから買つていただけたらと思います」

なんでもお金、お金の世の中。彼女は、長い問生きてきて、この時ほど、「いまだき、こんな人がいるんだということをも多くの人に伝えたい」と思つたことはないそうです。

横浜を代表する老舗、イセザキ書房社長、佐藤智子さんが実際に体験したいお話でした。横浜元町をお散歩の際には、ちよつと思ひ出してほしい土産話がございます。